

『自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり』の刊行にあたって

小誌は、本年3月に開催したJA共済総研セミナー「自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり〜食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る〜」（2014（平成26）年3月12日（水）、東京都千代田区JA共済ビル・カンファレンスホールにて開催）の特集号です。

JA共済総研セミナーは、今回の開催で通算14回目を数えます。これまでに農業問題、共済・保険、医療・ケア・福祉など、当研究所の調査・研究分野に関係する幅広いテーマを取り上げ、外部有識者の講演を主体に開催してまいりました。例年、JA共済連をはじめとする関係団体役員および研究者等、百数十名のご参加をいただいておりますが、今回のセミナーは、当研究所が2013（平成25）年4月に一般社団法人に移行してから初めての開催ということもあり、例年よりもカリキュラムを拡充し、4名のゲストをお招きして個別報告+ディスカッションという形で実施しました。

当研究所では、地域住民どうしの相互扶助を駆動させる新たな要素として「食」「自然エネルギー」「ケア」に注目し、2012（平成24）年、これらを地域再生につながるための理論を実証するプロジェクトを立ち上げております。詳しくは後述しますが、今回のセミナーにご登壇いただいたゲストの方はいずれも、当プロジェクト（対象エリア：愛知県三河中山間地域）に関わりのある方々です。

まず、セミナー前半に行われた個別報告では、「食」「自然エネルギー」「ケア」の各分野において地域コミュニティづくりに精力的に取り組まれている3名の実践者に事例報告をしていただきました。最初に愛知県厚生連足助病院・早川富博院長より「中山間地域医療機関を拠点とした地域コミュニティ再生構想」、続いて愛知東農業協同組合・河合勝正組合長より「地域と共にJA愛知東が目指す相互扶助の土壌づくり」、最後に東京農業大学農山村支援センターの澁澤寿一先生より「再生可能エネルギーの導入と地域活性化」について、それぞれご報告いただきました。

続いて、休憩を挟んで行われた後半の部では、前半の個別報告を踏まえ約2時間にわたってディスカッションが行われました。登壇者は6名。先にご報告いただいた3名に、もう一人のゲストである明治大学・野生の科学研究所所長の中沢新一先生と、当研究所理事長の町田勝弘が加わりました。コーディネーターは、当研究所主席研究員の川井真が務めました。

なお、思想家・人類学者として高名な中沢先生にはインキュベーターとして、持続的な地域コミュニティづくりの条件や協同組合の存在意義等について、より普遍的な観点からご発言いただきました。ここで参考までに、このように立場も経歴もまったく異なるメンバーが、どうしてこのセミナーで一堂に会することになったのか、その経緯をご説明しておきたいと思えます。

ことの発端は、2011（平成23）年、愛知県三河山間地域の健康創造をテーマに開催された「香風溪シンポジウム」でした。同シンポジウムは、足助病院の早川院長をはじめとする地元有志たちが、この地域の全住民に参加を呼びかけて実現した企画で、2011（平成23）年の第1回

目と翌年の第2回目、足助交流館という豊田市の施設を利用して開催されました。その際、当研究所研究員（川井）が司会進行役をお引き受けしたのがご縁で交流が始まりました。同シンポジウムの第1回目のテーマは「三河中山間の地域力を考える（十年後の地域をみんなで想像しよう）」そのときの基調講演者が澁澤先生でした。続く第2回目のテーマは「三河中山間地域高齢者の生活と健康」。このとき、早川院長、河合組合長と中沢先生による鼎談が実現しています。

このような経過で今回、JA共済総研セミナーという形での「協働」が実現するに至ったわけですが、彼らは当研究所にとって、研究プロジェクトの共同研究者というよりはむしろ、地域再生という「同じ志をもった仲間」という感覚に近い存在です。ある意味、今回のディスカッションは、その同志たちと交わってきたコミュニケーションの延長と捉えることができます。実際、当日のディスカッション会場は、いわゆる「サロン」的な雰囲気にも包まれていたように感じました。おそらく約150名のディスカッション傍聴者も同様の印象をもたれたことと思います。

今回のディスカッションのテーマは『食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る』でしたが、そこで語られた話題は非常に多岐にわたりました。

最近注目を浴びている「里山資本主義」と日本の資本主義の父・澁澤栄一思想、地域活性化と女性、そもそも「地域」とは何か、幸福と自然の関係性、食と健康、Ｉターンの若者たちの価値観や感性、祭りなどの伝統文化の本質、社会教育の場としての農村、自然とのリンケージ機能を担う農業と日本文化、JAという組織の存在意義……等々です。

なお、本編をお読みになる前にあらかじめお断りしておきますが、このディスカッションは、地域の担い手不足に悩む農山漁村を再生するための個別具体的な処方箋を提示しようとするものではありません。むしろパネリストどうしの語り合い全体を通して、より普遍的な「協働の原理」のエッセンスのようなものが浮かび上がり、一人ひとりの意識に小さな染みのような気づきが生まれている……そんなイメージを持って進めました。

地域社会の永続には住民どうしの「まとまり」や「つながり」が不可欠である、とよく言われます。社会システム論的な表現を借りれば、「同質性」と「機能性」でしょうか。いずれにせよそのベースは、日常行われるコミュニケーションだと思います。そういう意味では、いかにして地域住民どうしのコミュニケーションを、地域全体の幸福を捉える方向で、「自己創出」的に継続させていくか、この点について地域ごとの特性を踏まえて知恵をしぼること、また、そのための「場づくり」も重要な鍵といえるでしょう。

小誌がそのきっかけとなれば幸いですし、当研究所としても引き続き調査・研究事業を通じて、そうした取組みを微力ながらお手伝いしてまいりたいと思います。

最後になりますが、ゲストの4名の皆様にはお仕事柄、過密なスケジュールの合間を縫って本セミナーに駆けつけていただきました。この場を借りて改めて心より感謝申し上げます。